

京都府立医科大学の「今と未来」を伝える広報誌

The KPUM TIMES

COMMUNICATION MAGAZINE

Renewed

vol. 05
September 2026

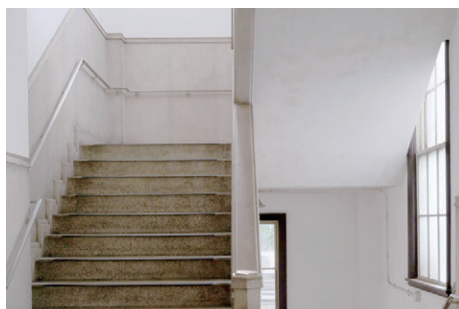
重ねた歩みをその先へ

特集1 | 日本医師会医学賞・日本学術振興会賞
受賞記念特集

特集2 | 広小路キャンパス活性化プロジェクト



京都府公立大学法人
京都府立医科大学
KYOTO PREFECTURAL UNIVERSITY OF MEDICINE



大学本部棟 階段

1929年竣工の大学本部棟に刻まれた歴史を物語る階段。天井廻りの縁の装飾には、ドイツ表現主義の意匠が見られます。

CONTENTS

03 学長挨拶

04 副学長・看護学科長紹介

橋本 直哉 副学長

的場 聖明 副学長

八木田 和弘 副学長

天谷 文昌 副学長

吉岡 さおり 看護学科長

特集1

06 日本医師会医学賞・日本学術振興会賞 受賞記念特集

外園 千恵 教授

樽野 陽幸 教授

特集2

08 広小路キャンパス活性化プロジェクト

09 Topic 1 研究紹介

10 Topic 2 産学公連携

11 Topic 3 看護

12 Topic 4 国際

News 1 学生の活動

海外実習報告

13 News 2 ワークライフバランス支援センター みやこ

14 新任教授紹介

救急・災害医療システム学 松山 匡 教授

新任管理職紹介

学生部長 八代 健太 教授

研究部長 榎村 敦詩 教授

医学基盤教育部長 大庭 誠 教授

16 大学、附属病院からのお知らせ

重ねた歩みをその先へ

～学長2期目を迎えて～

この4月より、学長2期目を務めさせていただくこととなりました。

1期目の3年間は、本学の理念である「世界トップレベルの医学を地域へ」の実現を目指し、「医学の分野で世界に伍する研究大学」と「地域の期待に応える地域の中核大学」という二つの大学像を掲げ、一步一步着実に歩みを重ね、本学の未来を支える基盤づくりに全力で取り組んでまいりました。

教育では、学修者本位の医学教育への転換と質保証体制の充実を進め、研究では産学公連携機構(K-MICS)の設立をはじめ、研究成果を社会へ還元する仕組みを整備してきました。そして、附属病院長と共に附属病院の機能強化、経営改善にも取り組んできました。また、北部キャンパスの充実、国際連携の推進も進んでいます。このように本学の未来を支える基盤を着実に築くことができたと自負しています。これらは、多くの教職員、学生、卒業生、そして地域の皆様のご理解とご支援によって実現できた成果であり、心より感謝申し上げます。

2期目は、この基盤を礎として、教育・研究・医療をさらに発展させ、その成果を社会へ還元することに力を注いでまいります。世界へ発信できる研究の創出、人材育成のさらなる充実、高度で持続可能な地域医療体制の構築、そして京都から世界へ広がる新たな連携を推進し、本学の存在価値を一層高めてまいります。

重ねた歩みを、その先へ。これまで築いてきた基盤を確かな力へと育み、教職員、学生、卒業生、そして地域の皆様とともに、京都府立医科大学の新たな未来を切り拓いてまいります。引き続き、ご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

京都府立医科大学 学長 夜久 均



夜久学長に聞いてみた! 続編

夜久学長ご自身が大切にされてきた「歩み」や「積み重ね」について教えてください。

自分自身を振り返ると、人からの信頼を得るため、今まで努力できましたし、それが歩みであったのかなと思います。これは患者さん、友人、仕事仲間、家族すべてに対して当てはまるかと思います。このことは府立医大にも言えることで、150年以上の歩みの中で、患者さん本位の医学・医療を展開する中で社会的信頼を築いてきたことは我々の強みになっています。

京都府立医科大学の学長を務めてよかったと思うことはありますか。

府立医大がどのような大学であるべきか、使命は何かを本当に真剣に考え、そしてそのためにすべきことを大学教職員と協働で遂行する機会が与えられたことです。

この広報誌をどんな人に読んでほしいですか？

大学を応援していただいている方々、また府立医大のことをあまりご存じでない方も含めて是非府立医大を身近に感じていただくために手に取っていただきたいと思います。

Introduction of the Vice Presidents and Dean of the Faculty of Nursing

副学長・看護学科長紹介

京都府立医科大学の副学長・看護学科長の先生方の、組織を導く「仕事の眼差し」と、
ふと覗く「プライベートの素顔」に迫ります。

- 1 副学長／看護学科長としての主な担当業務・達成したいこと
- 2 本学での一番の思い出
- 3 得意なこと・趣味



副学長(総務担当)＜大学DX・コンプライアンス体制・広報＞

はしもと なおや
橋本 直哉 大学院医学研究科
脳神経機能再生外科学 教授

- 1 デジタルトランスフォーメーション(DX)、危機管理とコンプライアンス関連事業を積極的に進めていきたいと思っています。附属病院では病院長主導のDXが先行しており、協働(追従)でできる部分を見極めつつ大学部門におけるDXを図りたいと考えています。また、府立医大・危機管理室(KPUM Crisis Management Office、仮称)の設置に向けての準備に入りました。コンプライアンスは専門部署の設立に向け、まずは教職員・学生のみなさんがアクセスしやすい窓口の整備から着手します。
- 2 学生時代、硬式野球部の新歓コンパで三条の鴨川を横断、トリアス祭野外ステージにてワイヤレスギターで走り回る。
- 3 ピアノ・朗読を聴くこと・野球の応援(愚息)・正信偈の解説。



副学長(地域医療担当)＜洛中アライアンス・臨床研究中核拠点＞

ま と ば さ と あ き
的場 聖明 大学院医学研究科
循環器内科学 教授

- 1 新たな地域医療構想を見据え、御所周辺地域の医療機関との連携「洛中アライアンス」を一層推進し、安心・安全で高度な地域医療提供体制の充実に努めます。また、産学官連携を強化し、国際水準の臨床研究・治験を推進するとともに、臨床研究中核病院の承認取得を目指し、本学の教育・研究・診療のさらなる発展に貢献してまいります。
- 2 学生時代のクラブ活動や臨床実習にはじまり、研究、診療、教育を通じて、多くの恩師、同僚、学生、そして患者さんとの出会いに恵まれました。本学で育まれた人との絆と学びが、かけがえのない財産です。
- 3 趣味は天体観測です。2061年7月に回帰してくるハレー彗星を楽しみに健康長寿を心がけています。



副学長(研究担当)＜地方創生事業・未来人材育成＞

やぎた かずひろ
八木田 和弘 大学院医学研究科
統合生理学 教授

- 1 研究・未来人材育成担当です。研究大学の価値は、0(ゼロ)から1を生み出すオリジナル研究の多様性と質で決まります。企業も大学との連携を考慮する際、この点を重要視するそうです。そして、オリジナル研究を通し社会に貢献しうる研究人材の育成です。その実現に向け、社会や企業とも連携し、様々な取組みと環境整備を進めます。
- 2 学生時代、恩師・井端先生や先輩方、友人たちとの様々な出来事。ヨーロッパ学会旅行、トリアス祭ダンパ部門。研修医時代、岡上先生はじめ三内の先生方や病棟の看護師さんたちとの日々。そして、今も手紙をいただく当時の患者さん。私にとって全てが宝物です。
- 3 自然観察・社会観察・人間観察。そこから法則性を見つけること。



新任 副学長(教育担当)＜大学認証評価準備・内部質保証体制・教学IR＞

あまや ふみまさ
天谷 文昌 大学院医学研究科
麻酔科学 教授

- 1 教育担当副学長を拝命し、大学認証評価への対応、内部質保証体制の整備、教学IRの推進をあわせて担当することとなりました。
本学の学生一人ひとりが、豊かで学びの多い学生生活を送り、成長を実感できるような教育・学修環境を実現することが目標です。学生や社会からこれまで以上に選ばれる大学となることを目指し、教員と職員が力を合わせ、教育の質向上と大学の発展に取り組めるような環境を作りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。
- 2 学生時代、トリアス祭の実行副委員長を引き受けました。当日までの準備は大変でしたが、楽しく、充実した日々を過ごすことができました。今でもよい思い出として残っています。
- 3 麻酔が得意です。



看護学科長

よしおか
吉岡 さおり 大学院保健看護学研究科
がん看護学・成人看護学 教授

- 1 学生一人ひとりが主体的に学び、教員一人ひとりが誇りを持って教育・研究に取り組める学科を目指しています。教育・研究・地域貢献を推進し、持続的に発展できる組織づくりに取り組んでいます。専門的な知識や技術を基盤に、個別的かつ創造的なケアを探究できる人間力豊かな看護職を育成し、社会に送り出していきたいと考えています。
- 2 私は2015年に本学に着任し、初めて京都府立医科大学の文化に触れました。今では本学を母校のように大切な存在と感じています。そのような中で学科長という大役を拝命したことは、私にとって貴重な経験となっています。この役割が本学での最も良い思い出になるよう、力を尽くしていきたいと思っています。
- 3 愛犬との対話。13歳になる「おじいさん犬」と毎日相談しながら暮らしています。

特集1 | 日本医師会医学賞・日本学術振興会賞 受賞記念特集

2025年度日本医師会医学賞



THE AWARD WINNER

外園 千恵 SOTOZONO Chie

所属・職：視覚機能再生外科学 教授

専門分野：眼科学

眼および眼の周囲の疾患を診断・治療し、治らない疾患の病態を明らかにして視機能の維持・改善を目指す学問

ABOUT THE AWARD

基礎医学・社会医学・臨床医学(内科系)・臨床医学(外科系)の各部門を通じ計4名に授与されるもので、1961年から続く名誉ある賞です。このたび日本眼科学会から推薦いただき、2025年度の日本医師会医学賞を臨床医学(外科系)で受賞しました。

RESEARCH

受賞研究：角膜難病の視力予後改善に向けた実用的研究

Stevens-Johnson症候群(SJS)・その重症型である中毒性表皮壊死融解症(TEN)は、突然の高熱とともに全身に発疹、びらんを生じる重篤かつ致死的な疾患です。救命後に高頻度に角膜混濁による視力障害とドライアイが後遺症となりますが、これらを治す方法がありませんでした。

① 眼後遺症の方が視力を取り戻すために

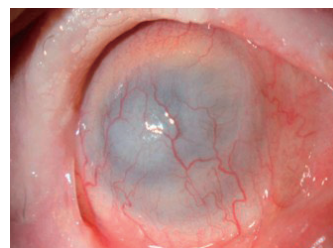
教室では木下茂名誉教授が培養自家口腔粘膜上皮シート移植(COMET)を開発し、2002年に世界で初めて成功しました。私はCOMETの実用化に取り組むとともに、新医療機器として2010年より輪部支持型コンタクトレンズを試作、開発しました。いずれも医師主導治験を実施し、SJS/TENを含む角膜難病を適応に薬事承認を得ました。これらの治療が実用化したことで、眼後遺症で失明に至った方が視力を取り戻せるようになりました(画像)。

② 発症後の失明を回避するために

SJS/TEN急性期における眼合併症の重症度を判断するスコアを開発し、診断基準に眼所見を入れていただきました。発症早期より眼科も治療に関与することで、眼後遺症を回避あるいは軽減できるようになりました。

③ 発症を回避するために — 素因と病態 —

患者さんの血液や組織を用いた解析により、日本人ではHLA-A*02:06、HLA-B*44:03、国際的にはIKZF1遺伝子が眼合併症を伴うSJS/TENと有意に関連することがわかりました。SJS/TENは遺伝的素因と自然免疫の異常応答が重層的に作用する疾患であることがわかってきました。



SJS/TEN眼後遺症

高度の角膜混濁により視力は手動弁(手の動きが分かる程度)



上の眼に対して羊膜移植、培養自家口腔粘膜上皮シート移植、全層角膜移植、白内障手術を同時実施し、術後に輪部支持型CLを装着することで視力1.0を得た。

MESSAGE

この度は伝統ある日本医師会医学賞をいただき、光栄に存じます。

稀少難治疾患とされるSJS/TENですが、どこで発症しても適切な治療が行われて眼後遺症を軽減できること、眼後遺症の方が視力回復できることを目指してきました。患者さん達は「同じ病気で苦しむ方が減るように」と快く研究に協力くださり、私たちを励ましてくれました。

新たな治療を実用化するまで、先の見えない道を進むような困難がありましたが、2014年に発足した本学の臨床研究支援センター(現CTREC)や病院スタッフ、多くの方のご協力で薬事承認を得ました。これからは新規治療の安全な普及と、さらなる予後の改善を目指していきたいと思っています。

栄誉ある学術賞を受賞された二人の先生から、先駆的な研究の紹介とメッセージをいただきました。

第22回日本学術振興会賞



受賞メダル
©日本学術振興会

THE AWARD WINNER

樽野 陽幸 TARUNO Akiyuki

所属・職：細胞生理学 教授

専門分野：生理学

私たちの体がどのような仕組みで働いているのかを明らかにする学問

ABOUT THE AWARD

独創的で卓越した研究業績を挙げ、将来世界をリードすることが期待される45歳未満の研究者に授与される、日本を代表する若手研究者賞の一つです。人文・社会・自然科学の全分野を対象に、毎年25名以内が選ばれます。



RESEARCH

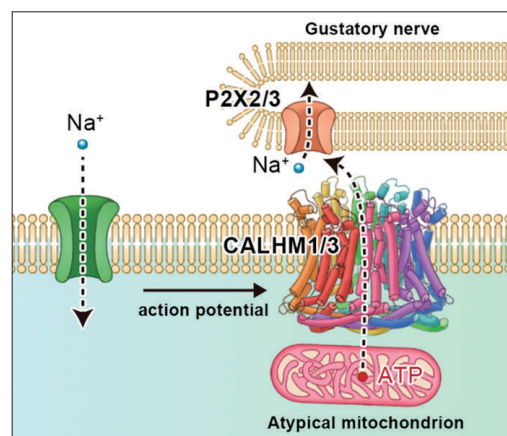
受賞研究：チャネルシナプスの発見とその生命機能の探究

神経細胞間の情報伝達を担うシナプスでは、伝達物質がシナプス小胞から放出される仕組みが唯一の様式と考えられてきました。しかし、味覚を受容する味細胞にはシナプス小胞が存在しないにもかかわらず、神経へ情報を伝達することができます。この矛盾は神経科学の大きな未解決問題の一つでした。

私はこの謎の解明に取り組み、イオンチャネルを介して伝達物質が放出される、従来とは全く異なる神経伝達機構を発見しました。私はこの新しいシナプス様式を「チャネルシナプス」と名付け、その構造、機能、生理的役割の解明を進めてきました。チャネルシナプスは、味覚情報を脳へ伝えるために必須であり、その発見は神経科学の教科書的常識を覆すこととなりました。

さらに、喉の上皮に存在し、チャネルシナプスを用いて神経と情報伝達を行う新しい感覚細胞群を発見しました。これらの細胞は有害な化学物質を感知し、嚥下や咳を引き起こすことで気道を守る役割を果たしています。この発見は、生体防御機構の理解を前進させるとともに、慢性咳嗽などの治療法の開発につながることが期待されています。

基礎研究から生まれたチャネルシナプスの発見は、新たな学術的概念を打ち立て、予防医学や創薬への応用へと発展しつつあります。



チャネルシナプス

MESSAGE

この度は栄えある賞を賜り、身に余る光栄に存じます。

これまで、流行に流されことなく独自の着想に基づいて推進してきた生理学研究をご評価いただけたことを、大変嬉しく思うとともに、大きな励みとして受け止めております。

生理学は生命現象の根本原理を探究する学問であり、新しい概念の提唱には時に困難や逆風も伴います。今後も「ゼロから一を生み出す」研究を着実に積み重ね、新たな視点から生命現象を理解することを通じて、医学の発展に貢献してまいりたいと考えております。

本研究を支えてくださった指導者、共同研究者、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。また、日頃より温かく支えてくれている家族にも心より御礼申し上げます。

振り返れば、京都府立医科大学で学部生として過ごした頃に抱いていた研究への憧れと高揚感を、今なお少しも失っていないように感じます。医学研究の長い伝統の中に身を置くことができた実感と、自分にも何か新しい発見ができるのではないかと少し青臭い期待が、研究者としての原点でした。これから研究の道を歩む学生の皆さんにも、人と異なる発想や選択を恐れることなく、自らの個性を磨き、それを強みとして独創的な研究に挑戦してほしいと願っております。

特集2 | 広小路キャンパス活性化プロジェクト

広小路キャンパス活性化プロジェクト 感謝と新たなスタート

多くのご支援への心からの感謝

2023年7月に始動した「広小路キャンパス活性化プロジェクト」は、附属図書館と看護学学舎という広小路キャンパスの貴重な資源を活かし、学生・教職員・地域の皆様が集う学びと交流の拠点づくりを目指して取り組んでまいりました。

これまでクラウドファンディングや寄附を通じて多くの卒業生、地域の皆様、関係者の方々から温かいご支援をいただきました。特に2026年2月から3月に実施したクラウドファンディング第2弾では、240名の方々から総額6,863,660円ものご寄附を賜りました。皆様から寄せられた励ましの言葉は、プロジェクトを推進する大きな力となっています。



学びと交流の場として大きく発展

ご支援により誕生したラーニングコモンズ「Koto Square」は、学生同士の学び合いや研究者との交流の場として定着し、多くの利用者に親しまれています。2026年1月には、2025年度の来館者数が10万人を達成し、附属図書館の年間来館者数も大きく増加するなど、広小路キャンパスの活性化が着実に形となっています。

また、特別講演会や文化イベント、地域との交流事業などを通じて、附属図書館は「知の蔵」であると同時に、地域に開かれた学びの発信拠点として新たな役割を担っています。



好評につき、第2期プロジェクトがスタート

こうした成果を受け、利用者アンケートでは約8割の方から継続を望む声が寄せられました。その結果、「広小路キャンパス活性化プロジェクト」は2026年4月から2029年3月までの第2期プロジェクトとして継続することが決定しました。

第2期では、附属図書館第三閲覧室の整備や図書館ホールの映像設備改修、看護学学舎のトイレリニューアル、特別講演会の開催など、学生、研究者などの学習環境と交流機会をさらに充実させる取組を進めてまいります。



オフィシャルグッズ販売もスタート

さらに、附属図書館では7月からカウンターにて大学オフィシャルグッズの販売を開始しています。大学の魅力を身近に感じていただけるグッズを取り揃えておりますので、図書館をご利用の際はぜひお立ち寄りください。



未来へ続くプロジェクトに

「広小路キャンパス活性化プロジェクト」は、施設整備だけではなく、人と人をつなぎ、新たな学びや交流を生み出す「育て続けるプロジェクト」です。これまで支えてくださったすべての皆様に心より感謝申し上げるとともに、第2期プロジェクトへの変わらぬご支援、ご協力をお願いいたします。

これからも広小路キャンパスが、学生・教職員・卒業生・地域の皆様に愛される「学びと交流の拠点」として発展していくことを願っています。

京都府立医科大学 附属図書館一同

基礎研究

コーヒーの成分が大腸がん細胞を抑える仕組みを解明

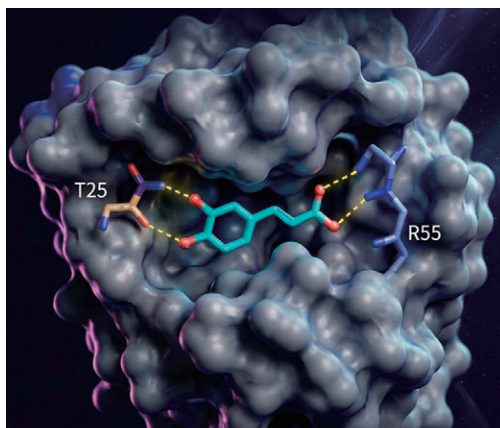
～コーヒー由来ポリフェノール「カフェ酸」の新しい標的分子RPS5を発見～

大腸がんは本邦でも患者数の多いがんの一つです。近年、「コーヒーを飲む人は大腸がんの発症リスクが低い」という疫学研究が数多く報告されていますが、コーヒーのどの成分が、どのように働いているのかは十分に分かっていませんでした。

私たちはコーヒーに含まれるポリフェノール「カフェ酸」に着目し、その作用を分子レベルで解析しました。その結果、カフェ酸は大腸がん細胞内のタンパク質「RPS5」に直接結合し、その働きを抑えることを見出しました。RPS5は本来リボソームを構成するタンパク質ですが、近年ではがん細胞の増殖にも関わることが明らかになってきています。

本研究では、分子生物学、ケミカルバイオロジー、スーパーコンピューターを用いた分子シミュレーションなど、多様な手法を融合して研究を進めました。こうしたアプローチにより、疫学研究で示されてきた「コーヒーと大腸がんリスク低下」の背景にあるミクロのメカニズムの一端を説明できたと考えています。今回の成果は食生活と健康を結ぶ新たな知見と、RPS5を

標的とした新しい大腸がんの予防・治療戦略につながることで期待されます。



分子シミュレーションにより明らかとなったRPS5タンパク質の“くぼみ”に結合するカフェ酸(中央)の様子

臨床研究

デジタルヘルスを活用した胃がん術後支援

胃がんの手術後は、1回の食事が減ったり、食後のおなかの張りやもたれ感、だるさ、体重減少などに悩んだりすることがあります。退院後の生活の中で、無理なく食事を続け、体力や生活の質を保つためには、患者さん一人ひとりの状態に応じた継続的な支援が重要です。

京都府立医科大学では、食事・栄養管理を支援するアプリ「おいしい健康」と連携し、胃がん手術を受ける患者さんを対象とした共同臨床研究を進めています。アプリでは、胃の切除部位や食後のおなかの張り・もたれ感、だるさなどの体調の変化、食事に関する困りごとなどに応じて、食べやすいレシピや食べ方の工夫を提案します。日々の食事を記録し、その内容を振り返ることで、体調や食べられる量の変化にも気づきやすくなります。必要に応じて、アプリを通じて管理栄養士に相談することもできます。

本研究では、こうした退院後の日常生活における食事支援が、体重や食事内容、生活の質などにどのように役立つかを評価します。「退院した後も、安心して食べること」を支えるため、胃がん術後の食生活におけるデジタルヘルスの可能性を検証していきます。

胃切術直後



つらい症状に合わせる

副作用があっても
負担の少ない食事
を提案

回復期



体力をつける

少量頻回食や補食
提案で栄養状態を
回復

安定期



普通の食事内容に戻す

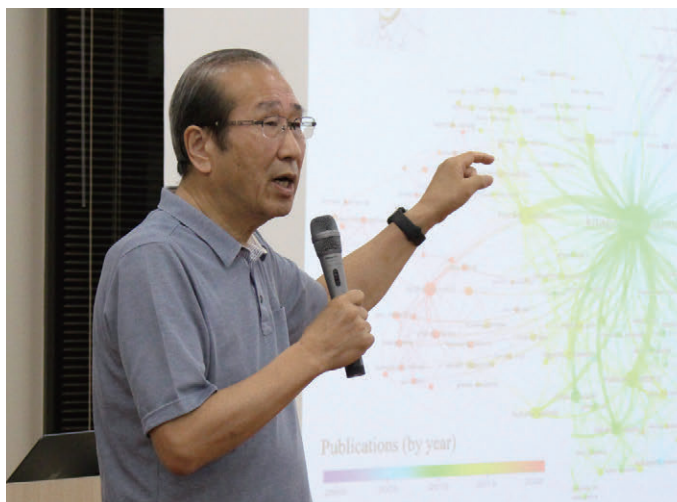
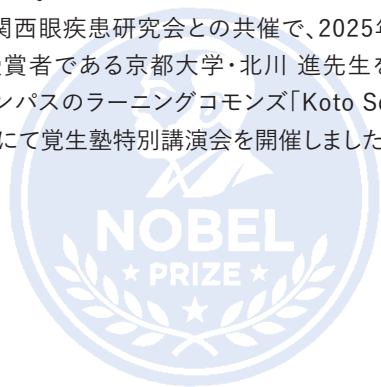
食事量の回復に合
わせて日常の食事
にナビゲート

ノーベル化学賞受賞者 北川 進先生をお迎えして 大学院特別講義・覚生塾特別講演を開催しました

2026年7月27日(月)、本学の産学公連携機構 K-MICS は、2025年のノーベル化学賞受賞者である
北川進先生をお迎えし、大学院特別講義・覚生塾特別講演を開催しました。

K-MICSでは、産学連携による実践的な環境下での教育プログラムの開発と実施を進め、社会のニーズに対応できる産業創出にも貢献できる人材育成を目的とした「覚生塾」を開講しています。

今回は、関西眼疾患研究会との共催で、2025年のノーベル化学賞受賞者である京都大学・北川 進先生をお迎えし、広小路キャンパスのラーニングコモンズ「Koto Square」(コトスクエア)にて覚生塾特別講演会を開催しました。



当日は、感覚器未来医療学教授・木下 茂先生をモデレーター、学長補佐/特任教授・飯野直子先生を総司会とし、夜久 均学長による開会挨拶の後、北川先生による講演「MOF 化学の創始と発展 — 東洋と西洋の思想が織りなした極致 —」が行われ、参加者のみなさんは非常に熱心に耳を傾けていました。

講演において北川先生は、ご自身の研究である「MOF (多孔性配位高分子) 化学」について、初期の着想から将来のビジョンに至るまで、専門外の参加者にも大変分かりやすく解説されました。また、ノーベル化学賞の受賞連絡を受けた当時の様子や、スウェーデンで行われた授賞式・関連行事の行程や模様について、真剣なエピソードの中にユーモアをたっぷりと交えて語っていただき、会場は大きな感銘と温かい雰囲気に包まれました。



続く質疑応答の時間では、最先端の研究に刺激を受けた学生や教員から途切れることなく質問が寄せられました。北川先生は一つひとつの問いに対して真摯かつ丁寧に応じられ、予定時間を過ぎてもなお熱量の高いやりとりが繰り広げられるなど、参加者にとって極めて濃密で貴重なひとときとなりました。

会場となった Koto Square には本学の学生や教職員をはじめ 100 名を超える参加者が集まり、熱気にあふれる講演となりました。

ポストコロナ時代の医療人材育成拠点形成事業

Project KPUMについて

Project KPUMの背景

近年、超高齢社会による医療ニーズの多様化や地域医療の維持困難などの問題に加え、新型コロナウイルス感染症を契機に医療人に求められる資質・能力が大きく変化しています。また、改正感染症法の成立を踏まえ、コロナ禍の社会で必要性が顕著になった重症患者に対応できる看護師の養成が求められています。そのような背景をもとに、令和6年度文部科学省「ポストコロナ時代の医療人材育成拠点形成事業(社会的な要請に対応できる看護師の養成)」が始まり、本学看護実践キャリア開発センターが申請した「Project KPUM 重症患者に対応できるジェネラリストナース養成プロジェクト」が採択されました。

Project KPUMの概要と特色

Project KPUMは「オール京都で備える・つながる」をテーマにしています。2024年度は附属病院の看護師を、2025年度・2026年度は京都府内の看護師を対象に、半年間の教育プログラムを年に2回実施しています。プログラムの内容は、特定行為研修で用いるe-learning、講義と演習、4週間のOn the Job Training、施設見学実習などで構成されており、中でも認定看護師や専門看護師、特定行為看護師による講義と演習を充実させていることが大きな特徴です。臨床工学技士による人工呼吸器管理、特定行為看護師による呼吸のフィジカルアセスメント、認定看護師・特定行為看護師が行う気道管理など、急性期・重症患者における直接的な呼吸ケアの他、専門看護師による小児重症患者看護や認定看護師による感染管理等、充実した人的リソースをもつ大学だからこそ提供できる急性期看護について幅広く学んでいます。OJTや施設見学実習では、京都府内の高度救命救急センター 2か所(京都第二赤十字病院、宇治徳洲会病院)、救命救急センター 6か所(京都大学医学部附属病院、国立病院機構京都医療センター、京都第一赤十字病院、市立福知山市民病院、洛和会音羽病院、京都府立医科大学附属病院)にご協力いただいています。2026年度までは受講料無料という点も大きな魅力です。

今後の展望

ジェネラリストナースが得た、より高度な急性期看護の教育プログラム受講による学びを自施設に持ち帰り、後進の育成に還元することで、地域の医療機関における看護の質の向上が期待できます。2027年度以降も当プログラムを継続して展開していけるよう、内容や方法の検討を進めてまいります。



国際学術交流センター長からのメッセージ

国際学術交流センター センター長
大学院医学研究科 呼吸器外科学 教授 井上 匡美

2026年度より国際学術交流センターのセンター長に就任しました。大学の国際化という重要なミッションにどのように貢献できるか、多様な視点で方策を講じていきたいと考えています。

その1つが、交流協定提携校の拡充です。海外での臨床実習についてはプログラムが確立し、毎年希望者が増加しています。ただ、2025年度は希望者が定員を上回り、全員の希望を叶えることができないという事態も発生。この枠を増やすことが最優先課題です。

また、海外からの若手ドクターや研究者の受け入れについては病院や各診療科任せになりがちで、大学のほうで把握できていない場合が多い。これを大学として一元管理できないか検討しています。大学として管理することで責任の所在が明確になり、よりスムーズな受け入れ体制構築、そして大学全体の国際化につながるのではないかと考えます。

私は約25年前にドイツへ2年間の研究留学、その後米国に

2カ月の短期留学を経験しました。よく言われることですが、日本を外から見ることで日本人や日本社会の長所・短所を客観視することができます。私にとっては、医師としても人間としても視野を大きく広げるきっかけとなりました。たとえ短期間であっても、みなさんもぜひ一度は日本を飛び出して、海外生活を経験してほしいと思います。積極的に情報を集め、常にアンテナを張っておくことが大切です。私たち国際学術交流センターができる限りサポートします。いろいろな壁を乗り越えて、外へ出るチャンスをつかんでください。



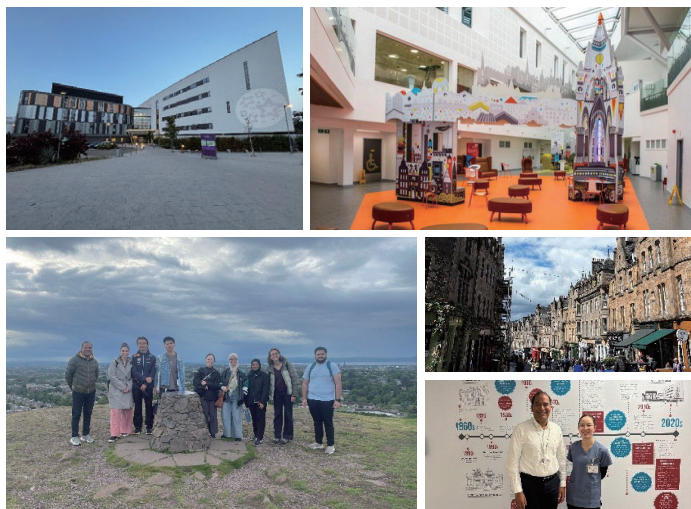
医学科 6回生 富永 つかさ

海外実習報告

私は国際学術交流センター直轄の学生団体KiSAに所属し、海外からの留学生との国際交流を行ってきました。その活動の中で彼らの高い向上心に感化され、私も海外臨床実習に参加したいと思い、この度応募しました。

そして2026年6月1日からの4週間、イギリスのエディンバラ大学の小児科において臨床実習を行う機会を頂きました。様々な部門を見学しましたが、特に神経部門ではてんかん診療を専門とする施設ならではの症例を数多く経験しました。また、脳波検査や神経心理学のレクチャーにも参加し、診断だけでなく患者の発達や生活の質を重視する小児神経診療について理解を深めることができました。小児救急では、病歴聴取を見学するだけでなく、自ら担当して指導医にプレゼンテーションする機会にも恵まれ、医学英語を実践する貴重な経験となりました。

さらに、各国から集まった留学生や現地学生との交流を通して、多様な文化や価値観、将来への考え方に触れ、国際的な視野を広げることができました。今回の実習で得た知識や経験を今後の医学学習や臨床実習に生かし、幅広い視点を持って患者に寄り添える医師を目指して努力していきたいと思っています。





～創設16周年を迎えて～

16th
anniversary

支援を受けた若手が教授へ！ ～16年の歩みが生んだ「好循環」～

当センターは皆様の温かいご理解とご協力のもと、創設16周年を迎えました。2010年に「男女共同参画推進センター」として発足し、現在は性別を問わず全教職員のワークライフバランス(WLB)を支える組織へと発展しています。かつての被支援者が教授等として活躍するなど、次世代を育む好循環が生まれています。医学科女性教員比率は、創設時(2010年)の8.9%から2026年度は18.4%へと倍増し、過去最高を記録しました。しかし、多様な人材が活躍できる環境づくりに向けて、歩みはまだ道半ばです。

医療・研究現場を支える「多角的なキャリアサポート」

● 子育て支援

長期休暇の学童保育、マタニティ白衣・スクラブレントールサービス等の支援を行っています。また、病児保育室「こがも」では年間約650名を受け入れ、京都市民の利用も可能とするなど地域にも貢献しています。

● 若手研究者支援

学位取得を後押しする最大10万円の論文掲載料等補助や、生活と両立している研究者の表彰(WLB若手研究者賞・みやこ賞)を行っています。研究者同士の交流の場も作っています。



● 就労支援

研究に専念できる職位(フューチャー・ステップ研究員)を設置しています。また医学生等を研究支援員として配置する研究支援員雇用事業も行っています。

● 広報・啓発

各種セミナーの開催・ニュースレター・ウェブサイト等での情報発信、相談窓口の運営を通じて働きやすい環境づくりを推進しています。

TOPICS

熱気あふれたノーベル賞受賞者講演会

nobel prize



テロメア研究で2009年にノーベル生理学・医学賞を受賞されたブラックバーン博士と配偶者のセダット博士を、2026年3月に米国から招聘して講演会を開催しました。子育てと研究を両立させた世界的なロールモデルであるご夫妻の講演には約150名が参加し大盛況となりました。ご夫妻の滞在中に、本学学友会のご厚意による歓迎食事会や、医学生との座談会も実現しました。

次世代の医療・研究を応援してください

医療従事者の活躍は、地域医療や医学研究の発展というかたちで社会に還元されます。当センターでは、センターの活動を応援・周知していただくための会員組織「キャリア支援コンソーシアム「えん」(CCえん)」(会費無料)のメンバーを募集しております。また、センター事業への寄附による応援も受け付けております(1口5,000円から・税制上の優遇措置あり)。

詳細は下記二次元コードまたはセンターウェブサイトをご覧ください。

WLB支援センター みやこ トップページ
<http://miyako.kpu-m.ac.jp/>



寄附のお願い
<https://miyako.kpu-m.ac.jp/donation/>



新任教授紹介

新任教授



大学院医学研究科 救急・災害医療システム学

松山 匡 Tasuku Matsuyama

略歴

2009年京都府立医科大学医学部卒業。京都府立医科大学附属病院および関連病院で救急・集中治療診療に従事。2018年京都府立医科大学大学院修了(医学博士)。救急医学、蘇生科学、集中治療医学を専門とし、院外心停止、救急医療システムに関する研究に取り組んでいる。近年は国際共同研究や医療データサイエンスを活用した救急医療の質向上にも注力している。2026年1月より現職。

座右の銘

知行合一

救急・集中治療・災害医療は、突然の病気やけがに直面した患者さんに対し、限られた時間と情報の中で最善の医療を提供するとともに、重症化した患者さんの全身管理や、災害時の限られた医療資源の適切な配分まで担う重要な分野です。その実現には、救急医・集中治療医だけでなく、各診療科、看護師、救急隊、医療技術職、行政など、多くの職種や機関との緊密な連携が欠かせません。

地域医療への貢献を基盤とし、附属病院における救急診療と集中治療の充実に加え、京都府内の医療機関、消防、行政との連携を深め、平時から災害時まで切れ目なく地域を支える医療体制の構築に取り組んでまいります。また、診療・教育・研究の三本柱を発展させ、救命のみならず、その後の生活の質や社会復帰までを見据えた医療を提供したいと考えています。次世代を担う医療人の育成、臨床現場から生まれた課題の科学的検証、国内外との共同研究を推進し、その成果を診療や地域医療へ還元してまいります。患者さん、医療者、地域社会に信頼され、平時にも有事にも貢献できる教室を目指してまいりますので、今後ともご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

新任管理職紹介

新任管理職



学生部長

八代 健太 Kenta Yashiro

大学院医学研究科 生体機能形態科学 教授

学生部長としての主な担当業務

教育支援課をはじめ事務局と連携しつつ、学生が学業と向き合いチャレンジするための環境を整えることが主な役割であると考えます。施設などインフラからメンタル面の悩みへの対応なども含め、その業務はとても幅広いです。

高校の教務主任に近いイメージを持たれるかもしれませんが、管理ではなく対話のための窓口のような存在です。教育

プログラムを策定する側と学生との間を取り持つ、いわば橋渡し役。学生側に寄り添いながらも、大学の管理職として、学生が嫌がることも必要であれば伝えます。なかなかむずかしいバランスの上に立っています。

学生部長として大切にしていること

学問の自由や大学の自由度、また学生が学生らしく活躍するための時間や環境はとても大切です。制約がある中でも学生と一緒に考え、対話を大事にしながら物事を前に進めていきたいですね。学生部長はその最前線に位置する存在なので、まずは学生としっかり向き合うことを一番考えていきたいと思っています。

学生部長としての意気込み

教員と学生の距離の近さは本学の文化と言えます。そこには対話が生まれます。多様な人材を輩出している背景にも、そうした文化があるのでしょう。学生のみなさんが卒業するとき「この大学に入って本当によかった」と思ってもらえるような、大学のあり方や教育環境を少しでも確保するために、微力ながら貢献できればと思います。



研究部長

煤村 敦詩 Atsushi Umemura

大学院医学研究科 病態分子薬理学 教授

研究部長としての主な担当業務

研究部長として、本学の研究活動を支える体制づくりを担当するとともに、修士・博士課程の入試から学位授与まで大学院教育に携わっています。また、大学中央研究室部門を統括し、研究設備や共通機器の整備・運用、研究支援体制の充実、学内外との共同研究や国際連携の推進などを通して、研究者が力を発揮できる環境づくりに取り組んでいます。

研究部長として大切にしていること

本学には多様な分野の研究者がおり、それぞれが特色ある研究に取り組んでいます。研究規模や専門分野にかかわらず、一人ひとりの研究の個性や強みを生かせるよう支援することを大切にしています。また、大学院生を含め、研究者同士が気軽につながり、新たな共同研究やアイデアが生まれる環境づくりを心掛けています。

研究部長としての意気込み

本学の研究力をさらに高めるため、研究IRを本格的に稼働させ、研究活動をデータに基づいて分析・支援する体制を整えていきます。また、研究設備やインフラ、研究支援組織の充実を進め、一研究機関として持続的に発展できる基盤づくりに取り組みます。研究者や大学院生が安心して挑戦できる環境を整え、その成果が医学・医療の発展と社会への貢献につながるよう努めてまいります。



医学基盤教育部長

大庭 誠 Makoto Oba

大学院医学研究科 医系化学 教授

医学基盤教育部長としての主な担当業務

医学科1年生を中心とした医学基盤教育カリキュラムの統括や学修支援等を担当し、教育担当副学長、学生部長、教育センター、クラス担任、教育支援課等と連携して運営しています。学生が円滑に専門教育へ移行できるよう教育環境を整備するとともに、現場の課題を踏まえた継続的な改善にも取り組んでいます。

医学基盤教育部長として大切にしていること

学長が大学運営方針に掲げている「学修者本位の教育」を大切にしています。大学教育の中心は学生であり、すべての教育活動は学生の成長に資するものであるべきと考えています。そのため、カリキュラム運営や学修支援においても常に学生の立場に立ち、「何が最も学びにつながるか」という視点を重視して取り組んでいます。

医学基盤教育部長としての意気込み

医学基盤教育に関係する学生・教員・職員のすべてが、それぞれの立場で充実感を持ち、安心して学び働ける環境を整えることを目指しています。関係者間の円滑な連携と相互理解を促進し、医学基盤教育をより良いものへと発展させたいです。学生が意欲的に学び、教職員がやりがいを持てる医学基盤教育の実現に向けて尽力していきます。

ご寄附のお願い

京都府立医科大学では、「世界トップレベルの医学を地域へ」をスローガンに、教育・研究・診療の充実を目指してご寄附を受け付けております。皆様の温かいご支援は、教育の充実、患者様の安心・安全な医療、そして未来の医療の発展につながります。

●ふるさと納税

ふるさと納税制度を活用した寄附金です。寄附金は、教育・研究環境の整備や国際交流事業、診療環境の充実等に活用させていただきます。

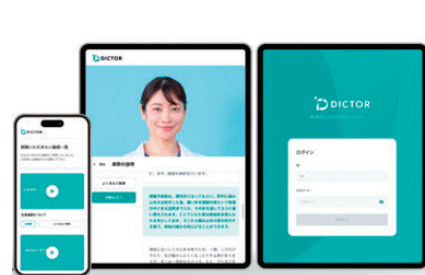
【ふるさと納税寄附金の活用事例】



人工呼吸器・汎用超音波画像診断装置の購入



救急車の購入



AIを用いた患者説明業務支援システム「DICTOR」の導入



ラーニングcommons「Koto Square」を設置



学生のクラブ活動施設等の整備



図書館ホールの音響設備改修

寄附額のうち二千円を超える部分について、所得税や住民税の税額控除の適用を受けることができます。

●奨学寄附金

大学の研究、教育及び診療を奨励するため、所属の研究等に対して受ける寄附金です。

●創立150周年記念事業へのご寄附

2022年に本学が創立150周年を迎えたことを記念して実施する「次世代トレーニングセンター（仮称）」の整備に対して受ける寄附金です。

●広小路キャンパス(附属図書館等)へのご寄附

学生達を応援し、図書館充実と看護学学舎整備等で学びと交流を支えるご支援をお願いします。オリジナルの返礼品もご用意しております。

●附属病院へのご寄附(病院募金)

附属病院で利用する医療機器・消耗品の購入や医療サービスの向上等、病院運営等に対して受ける寄附です。

●遺贈・相続財産によるご寄附

遺言書により相続財産をご寄附いただくもので、教育研究活動や診療体制の強化等に活用させていただきます。

●その他のご寄附

上記のご寄附以外にも、教育研究、診療環境の整備等を推進するため、広く寄附金を受け入れています。

詳しくは、以下の問い合わせ窓口までお問い合わせください。

上記の寄附金は、財務大臣が指定する寄附金(昭和40年大蔵省(財務省)告示第154号による指定)に該当するため、所得税法第78条第2項第2号及び法人税法第37条第3項第2号の規程により税制上の優遇措置を受けることが可能です。
なお、京都府民、京都市民の方は、個人住民税(京都府民税、京都市民税)についても優遇措置を受けることが可能です。

【お問い合わせ】

〒602-8566

京都市上京区河原町通広小路上る梶井町465番地 京都府立医科大学 事務局 総務課 総務係

TEL: 075-251-5210 ホームページ: <https://www.kpu-m.ac.jp/doc/about/kihukin.html>

※各寄附金の詳細は、ホームページをご確認ください。

ホームページ

